3月の道の駅情報！

大反響！奥大山水洗い珈琲！

みなさまこんにちは！道の駅奥大山物産館ぶなの森マルシェです♪
テレビをはじめ様々なメディアで紹介され話題の「奥大山水洗い珈琲」。当店ではどこよりも早く昨年末から取り扱わせていただいているのですが、こちらが大好評！通常コーヒーの生豆はそのままの状態で入荷されるので、産地の土ぼこり等がついたままで焙煎することになります。これが雑味となることがあるのです。奥大山水洗い珈琲はその生豆を、冷たく豆へのダメージが少ない「奥大山の水」で洗い、汚れを落とした後乾燥させ、焙煎します。この手間を加えることで雑味が少なく、クリアな味わいの「奥大山水洗い珈琲」が完成するのです。当店では現在コロンビア・ブラジル・グアテマラといった3種類の粉と豆を販売させていただいております。どれも「スペシャルティコーヒー」グレードの一級品です！是非お試しくださいませ♪

道の駅奥大山　売れ筋商品紹介！Vol.30

「白バラ 大山バター」

道の駅奥大山売れ筋商品紹介第30弾は、白バラの「大山バター」です♪ 以前よりお客様からご要望の多かった商品がこのたび定番商品となりました！ミルクからこだわり、丹念に手作りされるバターは、乳の風味が香り、濃厚でクリーミーさが特徴。トーストはもちろん、料理やお菓子作りにもお試し下さいませ♪

物産館ぶなの森マルシェ	8:30～17:30	ジビエ、地酒、特産品なんでも揃ってます！
お食事処ないろ樫	11:00～14:00	味に自信あり！地元食材を美味しくどうぞ！
直売所みちくさ館	9:00～15:00	地産地消でみなさまの健康を支えます！

特定非営利活動法人 こうふのたよりNEWS 2021・3月号
“あげなこと”“そげなこと”活動しました報告 《Vol.33》

■鳥取西部移住ポータルサイト「とっとりＷＥＳＴ」“奥大山の水洗い珈琲”の取材に同行しました！レポート♪

２月２２日(月)、米子市総合政策課移住定住相談員・中上弘恵さんによる鳥取西部移住ポータルサイト「とっとりＷＥＳＴ」の取材に同行し、昨年１２月に起業された遠藤明宏さんの珈琲焙煎所「奥大山の水洗い珈琲」のある美用の旧米沢小学校“理科室”を訪問しました。

昨年９月に大阪府から鳥取県に移住し、起業に向けた思いや「水洗い珈琲」が出来上がるまでを熱く語られました。詳しくは、インターネットで【TOTTORI WEST 移住ポータル|家族の時間が、はじまるよ。⇒ 地域情報】を是非ともご覧ください！！

★ちょこっと紹介★遠藤明宏（えんどうあきひろ）さん

千葉県出身。６３歳。大手食品メーカーを退職後、『奥大山の水』のある江府町で珈琲焙煎所を起業したいと、大阪府豊中市から２０２０年９月に奥様の故郷でもある鳥取県に移住し、１０月から「ＮＰＯ法人こうふのたより」の事務所で開業準備に入る。「ＮＰＯ法人こうふのたより」とは、２０１９年３月に大阪での移住相談会「鳥取来楽暮カフェ」での出会いがご縁となり、現在に至る。２０２０年１２月に無事に焙煎所を開業、『毎日が楽しくて楽しくてしょうがない！夢を叶えてくれた、江府町に貢献していきたい！！』と毎日活き活きとお仕事をされる遠藤明宏さんのご活躍にしばらくは目が離せません☺♪

■こうふのたよりのオリジナルＬＩＮＥスタンプができました！

ＬＩＮＥタンプに「こうふたろう」くんが登場しました！！
昨年５月頃から構想が持ち上がり、練りに練って、ようやく完成しました◎！！

『こんな表情の「こうふたろう」くんがあったらいいな♪』というご要望がありましたら
ＮＰＯ法人こうふのたより〔☎0859-72-3122〕までどんどんお寄せ下さい♪！！

鳥取移住、シニア起業、63 歳の挑戦

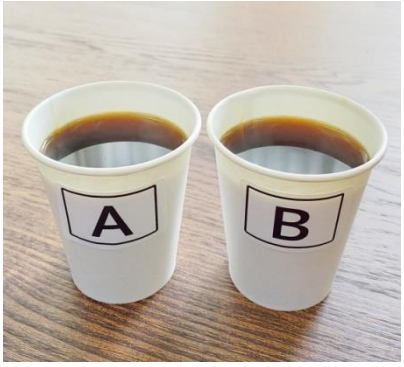
奥大山の水洗い珈琲合同会社
遠藤明宏

第４回　～コーヒーインストラクターの資格を取る～

今後、コーヒー業界で活動してゆくにあたり、コーヒーについて知識や知見を深めておく必要がありますし、客観的な資格を取得していれば、対外的に通用しやすくなり、自分に対する自信にもつながると思い、日本コーヒー協会（JQCA）のコーヒーインストラクター資格を取得すべく勉強を始めました。

この資格は１級、２級と別れており、１級は２級を取得した後でないと受験資格がないため、先ず２級の資格取得に向けて勉強を開始しました。年２回しか受験する機会がないため、何が何でも１回で合格しなければならず、かなりプレッシャーを受けながらも受験勉強のごとく取り組みました。63 歳になってこのようにがむしゃらに勉強するのは、本当に久しぶりの事でした。しかし、ある意味では若い時期を思い出すことができ、新鮮な思いで勉強に取り組む事ができたので、充実した時間を得ることが出来たことは幸せでした。

知識を問う問題は身につくまで覚えればそれなりに回答できますが、味覚を問われるテストもありました。試験会場で渡される 2 種類のコーヒーを試飲してこのコーヒーは何という種類のコーヒー豆かを答えるものです。



このテストは、数多くのコーヒーを飲み、その特徴を把握していないと答えられないため、あらかじめ主要な１５種類位の豆で飲み比べ、その違いを舌に覚えこませるトレーニングをしました。幸いなことに、事前の講習会で試験本番に出る豆で試飲を経験する機会があったため、ピンポイントで味の特徴を舌に覚えこませる事は幸いでした。

これで味覚に対するテストには自信がつき、無事に通過する事ができました。

その他、コーヒー豆の作付けから開花、豆の収穫方法、花や豆の構造等の知識、珈琲を抽出するメカニズム等を学ぶことができたことは、今後珈琲業界で働くにあたり、基礎知識を得ることが出来、大変有益でした。

生産地についても、今迄は暑い国で生産される事くらいの

大雑把な知識しか持っていませんでしたが、世界の珈琲生産地は、赤道を挟んで南北２５度のコーヒーベルト地帯で生産されている事を知りました。しかし地球温暖化で将来は南北３０度くらいまで拡大し、沖縄でコーヒー栽培ができるようになる時が来ると思います。すでに沖縄では珈琲栽培しているところがありますが、まだごく少量であり、日本が珈琲生産地の一つになるにはまだ数十年が必要と思います。
コーヒーインストラクターの話に戻しますが、２級は基本的な知識が大半を占めるのですが、１級ともなるとハードルは一気に高くなります。
伝え聞いた話では、珈琲生豆を見て、どこの国の何という品種かを答えるテストがあるそうです。コーヒー豆は一見するとどれも同じような形をしているように見えますが、よくよく見てみるとそれぞれに微妙な特徴があることがわかります。これらを見極めるためには、普段から数多くの品種の豆を見て触っておかないと全く歯が立たない内容です。コロナ禍が収束し、

ブラジルの農園

機械を使用した収穫

１級試験の再開が決まればぜひとも１級に挑戦したいと思います。
この試験を通して印象的であったことは、生産地の地形による収穫方法の違いです。
ブラジルのように、比較的平地が多い農園では機械による収穫ができますので、人手もあまりかからず大量に一気に収穫する事ができます。
一方、標高 1,500m 以上の高地栽培をする生産地では機械が入らないため、すべて人手をかけて

高地栽培農園

手摘みによる収穫

栽培及び収穫しております。これらは出稼ぎ労働者のお蔭であり、過酷な労働によって美味しい珈琲が飲めることに思いを致すと、一粒一粒を大切にしなければと思うのでした。（つづく）

大山登山できるかな。

最近、ＳＮＳで、暖冬で雪がないのか、頻繁に雪山の大山登山の投稿を見ます。
実は私も雪山の大山の登ったことがあります。
平成７年夏の高校総体登山競技が大山を中心に開催された縁で、大山町のＩ氏から平成７年の大みそかに大山登山のお誘いがあり、まだ若く体力には自信があったので、「何事も経験、いっちょやったるか」という軽いノリで「行きます」と返事をしました。「装備はあるから大山寺の駐在所に来い」と言われ、半信半疑で朝８時に到着、警察官と鳥取県登山部の方々がパトロールの一環で一緒に登られると聞いて安心しました。
ブーツと脚絆を渡されて、初めて本当に登るんだなーと実感が湧いてきました。ルートは夏山登山道を登って、帰りは行者谷を下って大神山神社経由大山寺です。６合目の手前でゆっくりと歩ていると登山道の下から雪が吹き上がってきて、登山を急がされるような感覚になったのを覚えています。途中、北側の斜面にロープを張って訓練をしているクライマーがいて、私から見たら、わざわざ命を山に投げ出すようにしてロープを操っている姿は、日常的ではありませんし、何が楽しいのか理解できませんでした。頂上近くになり手前の木道がはっきりと分かったときはホッとしましたが、周りは真っ白な不可触領域が広がる平らな雪景色で、木道を踏み外せば雪にはまって二度と戻ってこれそうにないと思い神経を集中して慎重に歩きました。
無我夢中の上り３時間、頂上付近にはまたまた異次元の世界がそこにありました。頂上の登山小屋周辺には１０以上のテントが張ってあり、聞いてみると「年越しをここでする」ということでした。
登山小屋の中でランチタイムです、昼ごはんは家から持ってきた「おにぎり」でした。そのおにぎりを見た登山部の方に冬山で米のご飯は火器がないときは持ってきてはだめだと言われましたが、意味が分からずおにぎりにかぶりつきました、そしてその意味が分かりました。おにぎりが氷のように冷たい、飲み込むまでに時間がかかり胃袋から体が冷えていくのがわかりました。Ｉ氏が火器を持ってきてラーメンを作っていたので、スープを分けてもらって冷えた胃袋が生き返りました。
帰りは行者谷まで簡単に下山できて少し拍子抜けしましたが、西日が足元を照らして、少し暖かいような気持になり、大神山神社に参拝して参道を下りました。数時間前の山頂付近の異次元空間は何だったんだろうと、２７年も前の話なのに、今もとても不思議な気持ちです。

後で聞いた話ですが、冬の大山は３，０００ｍ級の山に匹敵するということを聞いて、一緒に登った山のプロフェッショナルに助けられたんだなーと、今更ながら感謝しています。

もう雪山は無理だろうけれど、夏は行けるかなー？考えてみようっと！

文・写真　ＫＵＮＩＫＩ

「ほりのきょうすけが“じげのもん”になるまで」２３回目

２月に入って、もう春が来たかと思うくらい暖かい日が数日間続いたかと思えば、「まだ降るの??」と思わず言ってしまうほどの雪を再び体感した。天候は不思議なほどに様々だ。すごく当たり前のことをいうが、天候に左右されるのは人間個人レベルだけではなく、動物の行動・屋外スポーツの試合・山の見え方・公共施設での人の出入り等影響力の範囲は広い。

なぜこのような話をしているのかというと、天候によって影響を受けやすいもので最近新たな発見をすることができたからだ。それは「綺麗な星空」である。２月の初め頃の話。その日はよく晴れていた。仕事が終わり買い物をしてから駐車場に車を停める。時刻は１８時半過ぎでもう夜になっている。車を降りてふと空を見ると辺り一面に星が広がっていた。単純に「綺麗だな」と思うのであった。今までそこまで意識して星を見たことがなかった。小学生の頃、学校の宿題で星の観察があり、ベランダで見たことがあったのだが、その頃はチラッと見えるレベル、夜空の星に対して特に感情は抱かなかった。夜空をそこまで意識してみたこともなかった。「北斗七星＝おおぐま座」くらいの知識で今まで生きてきた。しかし、そんな僕がこの間の星空には感情を抱いている。東京と鳥取でこんなにも違うのかということを体感した。思わず写真を撮ってみたくなったがもちろん携帯のカメラで撮れるほどそうあまくはない。

その日にふと思い出したのが、道の駅「大山めぐみの里」に行った際、鳥取県星空マップの看板があったことだ。なんとなく見てみたら江府町で２か所観察スポットが掲載されていた。「鍵掛峠」と「貝田」である。鳥取県は「星取県」になりましたとそこには書いてあった。鳥取県の星空について少し調べてみると、環境省が行っている星空調査で過去１２回も日本一になっている。それに平成３０年から「星空保安条例」を策定し、美しい星空を保全する活動を全国の自治体に先駆けて取り組んでいるということが分かった。「そういうことか！」となった。

あの日から１週間後くらいに出先でふと夜空を見たら、また綺麗な星空が広がっていた。「いいなー」と思いながら眺めていたらこの間と違うことがあった。それは一人で見ていなかったことだ。「綺麗だね！」とその時にその場で共有することができたのであった。素晴らしいと思ったものを共有できることは良いことだなと思ったのであった。

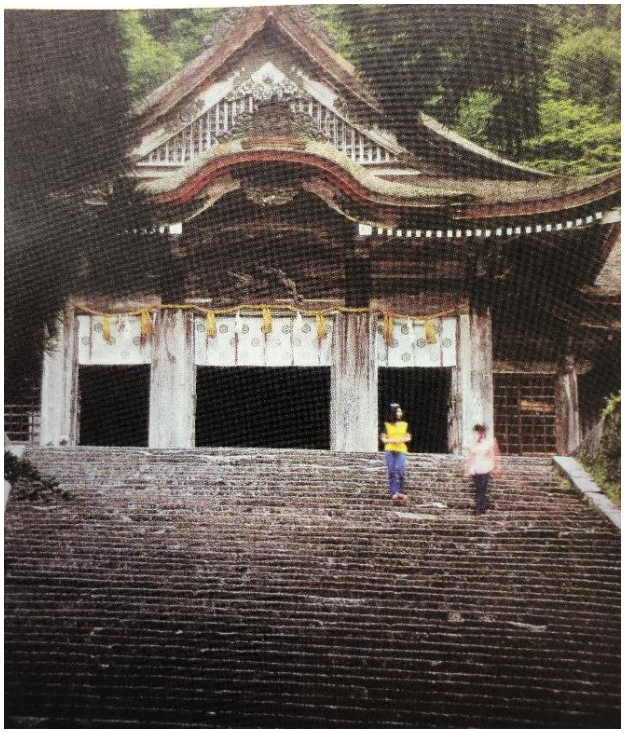
それからもう一つ気が付いたことがあった。それは自分の好きな歌で星に関するものが色々あったことだ。Mr.children の「星になれたら」、スピッツの「流れ星」、aiko の「アンドロメダ」、GReeeeN の「星影のエール」等。それぞれの曲の良さを熱く語りたいところだが、長くなりそうなのでやめておく。この間の出来事と重ね合わせて聴いてみるとまた改めて心に落ち着きを与えてくれる。

移住してそろそろ丸２年経とうとしている中でまた新たに鳥取県の良さを発見できた。それと同時に人と人との関わり・自身の趣味嗜好・新たな好奇心と感情との出会い。こんなにもあの日の星空はこんなにも僕に気づきをくれた。今度は知識を高めてまた眺めたらより面白くなりそうだと思っている。【堀野恭介】

奥大山つれづれ －弐拾捌－

遠い昔から、大山寺の大智明権現のご加護を願って多くの人々が奥大山古道を大山参りのために歩いた。時代が明治になる以前の大山寺の建物というのは現在の大神山神社であった。神社の正面奥が神様で左右に伸びる祭壇は仏壇である。これが日本固有の神の信仰と仏教信仰を融合したいわゆる神仏習合で全国新神社仏閣の普通の姿であった。

300年近く続いた徳川幕府の政治権力を、天皇の手に取り戻す「王政復古」を唱えて、生まれたばかりの明治政府は、大昔から天皇と繋がりの深い伊勢神宮を中心とした神道国教化政策を取り入れた。そのため明治元年（1868）に「神仏分離令」を発令して、お釈迦様の教えを棄てる「廃仏毀釈」という政策をうち出した。その結果全国各地で寺院や仏像などが破壊されていった。



奥大山古道を大山に行く途中、伯耆町桝水スキー場上部の横手道の路傍には１丁毎に石の「１丁地蔵」さんが立っていらっしゃる。よく見るとどの地蔵さんも胴が二つに切られている。廃仏毀釈で次々にたたき壊されたものを後日接着剤でくっつけたものである。

当時大山寺と呼ばれた現在の大神山神社の仏壇に安置されていた仏像は全て外に放り出されてしまった。それをお坊さんが一つ一つ丁寧に拾い集めて近くの寺に納めた。大山には古くは大小 42 の寺があり、その一つである大日堂という寺に拾ってきた仏像が集められた。それが現在の大山寺である。

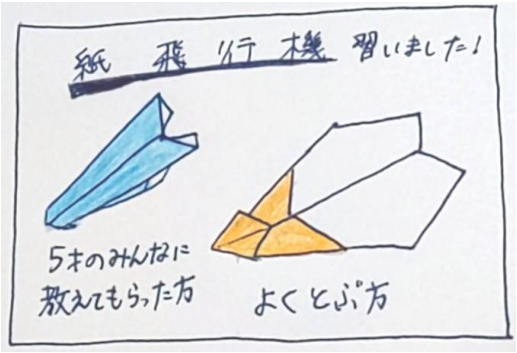
廃仏毀釈の名のもとに破壊行為がエスカレートした様子があまりにもひどいので、さすがの新政府も世の中が乱れることを危惧して、明治８年には信教の自由を支えるという口実で廃仏毀釈の運動は取りやめになった。しかし全国の仏閣ではかなりの仏像が破壊されてしまった。

江府町を通って瀬戸内の海岸まで通じている大山道に、たくさん立っている道しるべの中にも廃仏毀釈で壊された石造りの地蔵さんがいくつかある。多くの石造りの道しるべを寄進した人は、どういう訳か岡山県の人ばかりだ。【満】

新人保健師しょーのおさんぽ日和✿～2年目～　Vol. 21

こんにちは。春一番が吹いたそうですが、まだまだ寒い日が続いていますね。皆さま、いかがお過ごしですか？早いもので、もうすぐ３年目になります、保健師しょーです。コロナにも花粉にも負けず、今月も元気に駆け抜けていきますよー

○上手に飛ばす方法



先日、２回目の５歳児健診に行ってきました。前回の５歳児健診では、待ち時間に折り紙でハートの折り方を教えてもらいましたが、今回は**紙飛行機を作りました！**実は、私は今まで一度も紙飛行機を作ったことがなく、5 歳の皆に１つ、よく飛ぶ種類のものは先生に教えてもらいました。早速飛ばしてみましたが、なかなか遠くに飛ばない…。皆の腕の動きなどをみて試してみますが、よく飛ぶ紙飛行機ですら地面にすぐ落下してしまいます。そこで、「どうやったら上手に飛ばせるの？」とある子に聞いてみました。すると、「**自分の頭で考えんとうまくならんよ**」とバッサリ。た、確かに…。自分で試行錯誤してこそ上達するんですよね。５歳の子に大切なことを教えてもらった５歳児健診でした！

○伝説の日

先日の赤ちゃん健診では、約 15 組の赤ちゃんとその家族が来てくださいました！その日は、いつもがら空きな健診会場がたくさんの親子でにぎわい、涙が出るほど感動しました。

昨年度の某赤ちゃん健診の日、その日は総合健康福祉センターで赤ちゃん健診とは別に、狂犬病の予防接種が行われる日でもありました。その日の赤ちゃん健診の来場者はなんと、**たったの２組**。健診スタッフの数、そして、**予防注射にきた犬の数の方が何倍も多かった**という、忘れもしない**伝説の日になりました**。

だからでしょうか？出生届が出ると、職員皆で喜ぶ、子どもが集まっていると、とても感動する、という…。感覚がマヒしているのだと思います。それでも、子ども達の声がきこえる町っていいですよね。のびのびと成長していってほしいです。それではまた次回！

✿N.Shoko✿

町の宝先達に学ぶ～戦争の記憶を記録する～第3号

～大山滑空訓練所（３）～

発行２０２１．３．３（文責：井上裕吉）

（４）訓練生

2020 年 10 月 28 日に藤原巧さんの自宅で大山滑空訓練所のことについて聞き取りをした。

1930（昭和 5）年生まれの 90 歳である。集落では「巧（サトシ）さん」のファースト・ネームで呼ばれ、タオルで頬かむりをした独特のスタイルから

『えらいわ。九十になって体の方がガクッと来た。』

といつもの口癖が飛び出す。それでいて、今も軽トラックを運転して畑に出て刈払い機を扱う元気な先達である。

本リーズ第 1 号で、昭和史の概略を示したが、藤原巧さんのような昭和初期に生まれた人々は誕生から 1945（昭和 20）年まで戦争と共に時間を刻んだと言っても決して言い過ぎではないだろう。

誕生の翌年、1931（昭和 6）年の満州事変に始まり、上海事変、盧溝橋事件から日中戦争へ、そして 1941（昭和 16）年の真珠湾奇襲攻撃から太平洋戦争へと拡大していったおよそ 10 年。その中で、大山滑空訓練所が 1943（昭和 18）年から 1945（昭和 20）年までのわずか 3 年間に金屋谷地区の存在したことを考えると、当時 15 歳の訓練生たちにとって訓練期間は自身の今後の「進路」を決定する予定の濃密な時間であったことは容易に推測できる。

座談会【2020．11.2　於：神奈川交流サロン】

今回は藤原巧さんへの聞き取り、及び同年 11 月 2 日に神奈川交流サロンで行った元訓練生 3 人【藤原巧さん（米沢小学校）[写真左]、宇田川潔さん（明倫小学校[写真右手前]）、橋谷億さん（根雨小学校）[写真右奥]】の座談会で出た話をもとに訓練所での生活などについて紹介したい。

はじめに、当時（昭和 18 年頃）の少年たちの目で見た日野郡を中心とした世相とそれへの思いについて聞いた。

橋谷　『根雨小学校では講堂の屋根に（飛行機の）見張りをする場所ができていた。飛行機は山の上空を通りますから、すぐに行ってしまいます。どこを見るつもりだろうかなどと子どもの頃言っていた。』

宇田川『ここら辺には飛行機が飛んできたということはなかった。』

藤原　『その頃は死ぬのが怖いと思ったことはなかった。』

これらの話の中では、戦争と日常生活の距離が遠かったせいもあるが、のんびり

とした様子も読み取れる。一方では身近なところで「死」という言葉を 11，12 歳の子どもにも意識させるような事柄が発生したのであろうか。

1937（昭和 12）年に日中戦争がはじまると学校教育もその影響を強く受けるようになった。太平洋戦争が始まった 1941（昭和 16）年には小学校も国民学校と名前を変えた。教育内容も戦時体制を支える人材育成をするものに変った。

さらに、1943（昭和 18）年には教育課程通りに授業が行われる日が少なくなり、奉仕活動が中心になっていった。

国民学校四年生以上の児童は援農作業や勤労奉仕作業が行われた。国民学校の高等科では、少年兵や満蒙開拓青少年義勇軍に応募し学校を去っていく児童も見られるようになった。

橋谷　『少年兵でも盛んに予科練が宣伝された時代ですから、級上（学年上）のものは予科練を希望していた。』

宇田川『満蒙開拓団の募集もあった。』

第 1 号で紹介したように翌 1944（昭和 19）年には本土空襲が始まった。そして、1945（昭和 20）年 7 月 28 日にはアメリカ軍艦載機による大山口列車空襲事件が発生し、多数の犠牲者を出したことは山陰地方でもよく知られている。

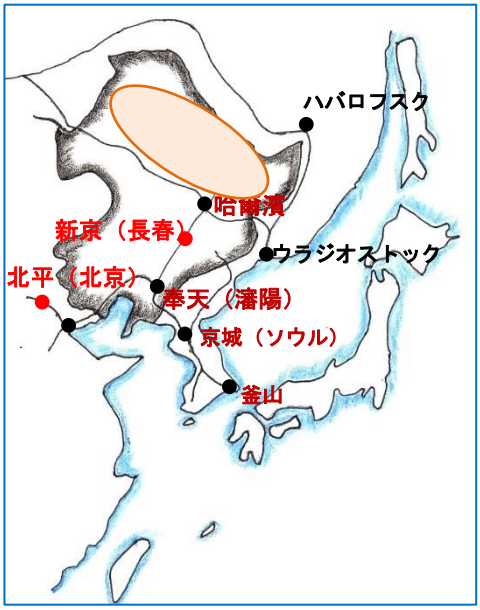
橋谷　『大山口駅の向こう側に記念碑が立っています。丁度、今の陸橋がかかっているところに機関銃の弾の跡があった。』

ここで、学校教育の現場に大きな影響を与えた宇田川潔さんの言う「満蒙開拓団」、つまり「満蒙開拓青少年義勇軍」のことに触れておきたい。

1932（昭和 7）年満州国（現中国東北部）の建国が宣言された。1937（昭和 12）年には満州国に青少年を送り出す制度として「満州青年移民実施要項」が作成された。この募集要項によると、応募資格は

> 尋常小学校の教育課程を修了し、数え年 16 歳から 19 歳までの身体強健なる男子で、父母の承諾を得たもの。

とされた。



「満州国」【（　）内は現在の地名】

応募をして許可されたものは茨城県内原にある「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」で三か月の学習、武道、体育と農作業の基礎訓練を受けたあと、満州国にわたりそれぞれの訓練所で三カ年の訓練を受けて、各地に入植したのである。

次ページの表は江府町史にある「満蒙開拓青少年義勇軍の応募状況」を地域別に整理したものである。ただし、「到着地」は 1945（昭和 20）年の満州国消滅によって現中国にはない省名である。

また、孫呉、勃利、李家、鉄驪、通北の位置を地図で確認すると、いずれも満州国の首都新京（現長春）から北東部に位置し、北緯 45 度から 50 度の間におさまる。**【左図参照塗りつぶし部分】**

満蒙開拓青少年義勇軍の応募状況（江府町役場調べ）

渡満年月	人数			到着地
	米沢	江尾	神奈川	
昭和13年9月	1		1	黒河省孫呉
昭和14年6月	1	3		三江省勃利
昭和16年6月	1	3	1	北安省李家
昭和17年5月	1		2	北安省鉄驪
昭和18年6月		3	4	北安省通北
不明		1	2	不明

江府町史から作成

特に孫呉はロシアとの国境に近いところに存在し、北海道の稚内から樺太の中部辺りに相当する緯度区域内である。酷寒の地である。

鳥取県から開拓団 1339 名、青少年義勇軍 2287 名が大陸へ渡ったことが記録されている。【鳥取県史ブックレット第 7 巻『満蒙開拓と鳥取県—大陸への遥かなる夢—』小山富見男】

その中で、江府町では青少年義勇軍として各地域から 24 名を数えることができる。

全国的にこの募集には力を入れて、鳥取県でも「校長を通じて何名という割り当てまで行った。」【江府町史】という。

このようにして国策にしたがって満州に送り出されていったが、

「六人が病死あるいは現地招集による戦死者として帰らぬ人となったのである。」【江府町史】

氏名	生年月日	渡満年月	訓練所の場所
宇田川正一	1925（大正14）年	1941（昭和16）年	北安省李家
吉川文雄	1928（昭和3）年	1943（昭和18）年	北安省通北

また、左の表は 1941（昭和 16）年に渡満した宇田川正一さん、1943（昭和 18）年に渡満した吉川文雄さんの記録をまとめたものである。この二人は、回想録を残している。【江府町史】それを読むと、夜はランプ生活で冬は零下三十数度の日々が二か月も続き、食事の量が少なかったことも書き残している。15，16 歳で希望と夢をもって渡満した二人にとって、江府町での生活とは違い厳しい生活を強いられたことが回想録の言葉から伝わってくる。

話を大山滑空訓練所のことに戻す。

本シリーズ第 2 号では訓練生 35 名の集合写真を紹介した。その写真は「写真アルバム米子・境港・西迫・日野の昭和」と題して、2012 年 12 月 13 日に樹林舎（名古屋市）から発行された写真集の「戦前・戦中の教育」の章にも採用されている。提供者は神庭孝氏である。ただし、写真の表題が「大山滑空訓練所**受験生**」となっていることが気になる。

というのも、写真の中の一人一人はすでに日野郡内の高等小学校 2 年生から「選抜」されて入所した者であるにもかかわらず、入所試験（面接等）を待つ「**受験生**」という意味に通じるからである。本シリーズでは訓練生に統一する。

次ページの写真は藤原巧さんが示した 2 枚目の集合写真である。前回のものと場所はほぼ同じであるが、写真内の人数は 70 名を数える。全員が帽子・制服を着て六列に整然と並んでいるところから入学した頃の訓練所全体の集合写真と思われる。前一列目及び二列目は訓練生、第三列目は、右端の人物が椅子に坐っているように訓練所の教官（または職員）と考えられる。

第四列目の右端2名は女性で一人は割烹着を身につけており、その右はセーラー服のネクタイのような服装であることがわかる。左側の残り10名全員が訓練生。

さらに、第五、六列目の合計24名も訓練生と考えられる。前第一、二列目の訓練生22名と第三、四、五列目の訓練生34名は同一学年か異年齢集団かこの写真では判別はできない。

訓練所全員の集合写真昭和19年頃【藤原巧さん所蔵】

この写真について、座談会で自身の特定をしてもらった。それによると、第六列目の左端が藤原巧さん（黒い学生帽）。左からから7人目が橋谷億さん（白い戦闘帽）。左から9人目が宇田川潔さん（黒い学生帽）であることがわかった。

次に第四列目の右端二人の女性のことについて尋ねた。

藤原　『金屋谷から来た炊事の人ではないか。』

宇田川『覚えています。食事はまあ、よかった。』

橋谷　『このおばさんは中井または木村と言っていたかもしれない。夫婦でおられて、食事関係のことをしておられた。』

さらに、右端のセーラー服姿のような女性のことについては

橋谷　『本部付きの人ではないかと思います。』

「本部」とは学校で言えば職員室のようなものであろうか。橋谷さんには本部での仕事の経験があった。

橋谷　『私も本部には20日間行った。始まりは春ごろからだった。早く行ったのは食料運びや岸本からめん羊を連れて上がった。一時は1週間ほど行って食料を運んだりした。』

大山滑空訓練所があったところは、元々めん羊などを飼育する放牧場であった。そこにある建物を改築・増設して訓練所を設置したのである。

藤原巧さんの証言がある。

藤原　『おそらく先輩もいただろう。』

この後、同期の訓練生の名前が次々にあがってきた。さらに、滑空訓練機のこと、訓練の内容など、具体的な事柄が明らかになっていった。

詳細については次号で紹介したい。